

2021 年度 FD セミナー

学生の深い学びに繋がる「新しい対面授業」

本学では、オンライン授業のメリットを超える更なる質の確保を目指した「新しい対面授業」を2021年度から開始しました。具体的には、ICTを活用することにより、知識を教授する授業の一部をオンデマンドや授業外学修に移行し、対面授業では教員が学生の質問に回答する、学生同士が議論するといった「対面でしか得られない教育効果」の獲得を目指すものです。

今回のセミナーでは、新しい形での授業を行っている先生方から、その実践事例をご紹介いただきました。また、セミナー後半には、実際に授業を受けている学生の声を聴く時間を設け、どのような授業が「より深い学び」に繋がるのかを共に考える機会としました。

巻頭特集では、その様子を紹介します。

授業事例発表

- ① フィードバック / グループワークの実践例と教育効果
西島 壮 (大学教育センター 准教授)
- ② 理系科目での対面・オンラインのハイブリッド授業の事例
角野 秀一 (理学部物理学科 教授)
- ③ 哲学 B における kibaco の活用
木田 直人 (人文社会学部人文学科 准教授)

6/18

15:00~
17:40

学生との意見交換会

進行：松田 岳士 (大学教育センター 教授)

学生：7名

パネリスト：西島 壮 (大学教育センター 准教授)
角野 秀一 (理学部物理学科 教授)
木田 直人 (人文社会学部人文学科 准教授)
横田 佳之 (大学教育センター長)
松山 洋 (都市環境学部地理環境学科 教授)
國政 浩 (教務課長)

総合司会

小林 正典 (理学部数理科学科 准教授)



フィードバック / グループワークの実践例と教育効果



大学教育センター 准教授

西島 壮

にしじま たけし

コロナ禍の影響で、交友関係、コミュニケーション不足に悩む学生に寄り添った授業を展開している西島准教授から、グループワークやフィードバックがもたらす教育効果について学ぶ。

私は、学部授業として保健体育科目（講義、実技）と教養科目を担当しています。今回は講義科目における事例、特に最近フィードバックとグループワークを重視しているの、その実践例と教育効果について紹介します。

1. 昨年度の経験

2020年度前期は、保健体育科目の実技と講義を担当していました。手探りでオンライン授業を開始したのですが、途中で学生が「学生間の交流」に飢えている、「孤独を感じている」ことを痛感し、実技では後半からZoomのブレイクアウトルームを活用したグループワークを取り入れました。講義形式の授業でも「学生同士の交流の機会を提供してあげたい」と思い取り入れたところ、思わぬ教育効果があったので、後期の教養科目では毎授業、グループワークを取り入れることにしました。

学生からは、「その日に感じたこと、考えたことを共有することによって考えがより強固になっていく喜びが感じられた」「グループワークをメインにした授業設計だったので、受講する前は不安だったけれども、ただ講義を聴くだけ以上に内容を理解して実践することができた」「この授業体制は刺激的で面白いので続けてほしいし、他でも増えてくれるといい」といったコメントが寄せられました。

2. 授業の実施方法

具体的な授業の実施方法としては、昨年度の後期は90分を以下のスライドのように配分しました。前半は先週の授業内容のフィードバックを15分くらいかけて行います。講義パートは事前に録画した動画をYouTubeにアップし、それを授業時間内に見てもらいました。オンライン授業は結構疲れるので、5分程度の休憩を設けてから、20分ほどグループワークを行いました。最後に10分程度でミニレポートを書いて提出してもらったのですが、授業の様子を見ると、なかなか授業時間内にkibacoで提出できず、授業後に取り組む学生がほとんどでした。



2021年度前期は、できる限りこの体制を取ったまま新しい対面授業に移行しようと考えました。しかし、講義パートを事前にオンデマンドで行い、対面授業はグループワークだけで行うことがイメージできなかったことと、メリハリも大事だと思い、今回は授業内でスライドを使った講義を行いました。そして昨年度と同様、最後にミニレポートを提出させました。提出方法も迷ったのですが、今回は答案用紙に書かせて、授業内に提出させました。

3. 課題のフィードバック

私の授業では、学生から提出されたミニレポートの一部を抜粋して、A4判1枚くらいにまとめたものを学生に配り、フィードバックに活用しています。扱う内容は先週の授業内容、要点の振り返りです。やはり1週間前のことを振り返るのは、記憶の定着に有効だと感じています。また、誤って理解してコメントしている学生もいるので、その修正も行います。学生は同じ授業を受けていても色々な考え方を持つので、その多様な意見をを紹介することを特に大事にしています。また、主専攻に応用するといった発展的な意見も、優秀なコメントとして紹介しています。

学生に授業の満足度を尋ねたところ、履修している全ての科目については、「満足している」が半数程度でしたが、私の授業である「身体運動学」では、「大変満足している」と答えた学生が76.9%を占めました。「理解がより深まった」「自分にはなかった着眼点や体験談を知ることができるのでとても有意義」「いいリアクションをもらってモチベーションも上がった」といったコメントも寄せられ、少し手間をかけることで本当にいい時間になると思っています。

オンライン授業のときはkibacoでミニレポートを提出させていたのですが、そのメリットとしては、採点結果の通知が非常に容易であり、デジタルで届くのでフィードバック資料の作成が本当に簡単だと思いました。一方、デメリットとしては、学生の様子を見てると授業時間内でまとめて提出するのは結構難しいようでした。それから、出席確認の方法も別途考える必要があります。

そこで対面授業では、kibacoではなく答案用紙で提出させることにしました。そのメリットとしては、授業時間内で回収でき、さらに出席確認も兼ねることが出来ます。個人的な印象としては、自由で率直な意見や感想が聞けると感じました。デジタルで書くと率直な意見を上書き修正してしまうので、ざっと書いたものを見られることも大事だと思います。デメリットとしては、採点結果の通知が難しいことです。その点に関しては学生からも「点数が分かればモチベーションにつながる」というコメントがあり、2割程度の学生が「kibacoで提出することで得点をフィードバックしてほしい」と答えました。しかし、「その場で紙に書いた方が自分の意見を書きやすい」「授業時間内に完了してほしい」というコメントも多く、6割強の学生は答案用紙での提出を望んでいました。

4. 講義パート

次いで、講義パートの満足度を聞いたところ、おおよそ良かったのですが、懸念点としては講義時間を短くしたことが挙げられます。コロナ禍前は65～70分間かけていた内容を、3分の2程度に縮めて説明することに挑戦しました。そのため、理解度が下がるのではという懸念もありました。昨年度は動画で見返すことができたのですが、今年度は対面で講義をするので聞き逃してしまったらそれまでになってしまいます。

ただ、時間を短くしたからといって内容を削ったわけではありません。そもそも私たちは20分くらいかかる学会発表を10分に収めるトレーニングを積んでおり、短く話すことはできるはずで、にもかかわらず、授業になった途端、時間が持たないという後ろ向きの気持ちで余計な話をしてしまうことがあると思います。また学生からは「最後にグループワークがあることで、集中して講義を聞いている実感がある」とのコメントがあり、短い時間の中、緊張感を持って講義を聴講していることが分かりました。

5. グループワーク

グループワークは全体で15～20分、できれば20分以上で、1グループ3～4人、くじで座席指定をしました。個人的には3人がベストだと感じています。くじを引いたら、しっかり対面で話し合えるように通路を挟んで三角形で座ってもらいました。

スライドのタイトルは「グループワークの進め方 (全体で15～20分)」です。内容は以下の通りです。

- 1グループ3～4人、くじで座席指定
- アイスブレイク (自己紹介)
 - 1人2分 (慣れたら1分)
 - 他のメンバーの質問に答える
 - 雑談、大歓迎
- 課題はオープンクエスチョン (都立大生は“正解”を求めたがる!?)
 - 例) 「ぐっときたポイントの紹介」⇒「これまで・これからの私とスポーツ」
- グループワークのコツ
 - ①リーダーシップ < フォロワーシップ
 - ②PLAYを大事に (遊ぶ、楽しむ、役割を果たす、演じる)
 - ③目標はその空間・時間の最大化
 - ×業績第一の「ブラック企業体質」
 - ×全て適当な「ゆるブラック企業体質」
 - ④Noblesse Oblige: グループワークが得意な人には責任がある
 - ⑤私、グループワークは結構できる! (西手じゃない)
 - ※全体でカメラオンにしてからブレイクアウトスタート

次に、アイスブレイク (自己紹介) をしました。自分で自分を紹介するのではなく、「出身はどこですか」「学部は何ですか」といった他のメンバーからの質問に答える形式で進め、雑談になっても大歓迎としました。

課題は必ずオープンクエスチョンで問うことを心掛けています。印象として都立大生は真面目なのか、正解を求めたがるので、あえて正解のない課題に取り組んでももらいました。

グループワークになったら「ぐっときたポイント」を紹介してもらいます。同じ講義内容でも印象に残るポイントが全く違うので、多様であることを感じるためにも、「ぐっときたポイント」の紹介はうまくいっています。

グループワークのコツとしては、リーダーシップよりもフォロワーシップの方を重視することです。このことを伝えるだけで、都立大生はがらっと変わってきます。これは非常に有効です。

それから、「PLAYを大事にしましょう」と言っています。PLAYには「遊ぶ」という意味もあるのですが、「役割を果たす」「演じる」という意味もあるので、「社会人というのはそんなものなんだよ。演じてもいいんだよ」と言うことで、学生の心が軽くなるような感じがします。

また、その空間・時間の幸せを最大化することを目標としています。業績第一だとブラック企業体質のようになってしまいますし、全てが適当だと何となく全体的に緩くなってしまいます。それも違うということで、全力で幸せに向かって取り組むようお願いしています。

それから、Noblesse Oblige といって、「グループワークが得意な人には責任がある」という言葉が響く学生もいたりします。あと、最後はやはり心の持ちようであり、「私はグループワークが結構できる」ということも大事だということを伝えています。

オンラインの場合はいきなりブレイクアウトにしてからカメラオンにすると抵抗があるようで、まず全体でカメラオンにしてからブレイクアウトを始めるのも有効でした。

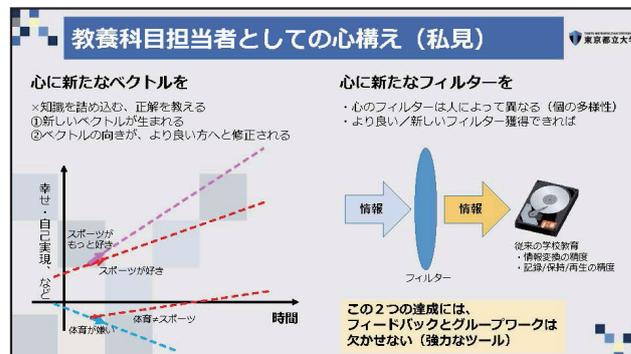
グループワークに満足している学生は4分の3もいました。理解度は深まったかという問いに対しては、「非常にそう思う」が半数でした。「講義の理解がさらに深まるとともに、自分では気付けなかったところに気付ける」「グループワークこそ大学教育の醍醐味ではないか」というコメントもありました。

6. 教養科目担当者としての心構え

教養科目を担当するときの私の心構えとしては、「心に新たなベクトルを」をキーワードにしています。知識を詰め込んだり、正解を教えたりするのではなく、学生の心に新しいベクトルが生まれること、ベクトルの向きがより良い方向へと修正されることを目指しています。

例えば、スポーツが好きな学生であれば放って置いてもいいのですが、体育が嫌いというベクトルを持った学生は、時間をかけてどんどん悪い方向に向かって

いきます。ただ、授業の中で「体育とスポーツは違うのだ」という様に新しいベクトルをつくってあげると、将来は何かいい方向に向かってくれるのではないかと思います。このように、ベクトルの向きを整えてあげることが教養科目の役割だと感じています。



それから、「心に新たなフィルターを」ということも新しいキーワードとして取り組んでいきたいと思っています。情報は自分自身のフィルターを通して変換して脳に蓄積していきます。従来の学校教育では、情報変換の精度を劣化させないことが求められていたのですが、同じ情報でも人によってフィルターが違うので、受け取り方が全く異なります。そこに個の多様性があることに気付くことが大事だと感じています。より新しい、より良いフィルターを獲得できれば、学生の将来も豊かになっていくことでしょう。

新しい対面授業で重視されるアウトプットについてですが、まずインプットの部分をより良くしていくことが大事で、その役割を担うのが教養科目だと思っています。この二つの達成にはフィードバックとグループワークは不可欠であり、講義だけでは絶対に実現できないと感じています。

質疑応答

(小林) グループワークが苦手で、個人活動を好む学生もいると思うのですが、どのような対応を取られていますか。

(西島) 学生に「みんなの前で私がおどおどしていたらどう思う？」や、「社会に出る上で初対面の人と話すことは絶対に大事だよ」とか、オンラインのときには「もしかしたら就職試験をオンラインでやるかもしれないよ」みたいなことを言って、危機感を募らせるような声掛けをし、苦手であっても必要性を感じてもらうことを大切にしています。

理系科目での対面・オンラインのハイブリッド授業の事例



理学部物理学科 教授

角野 秀一

かくの ひでかず

理系科目において対面とオンラインのハイブリッド型授業を実施する場合の注意点や Tips のほか、定期試験用のルーブリックや自己採点の取組みについても紹介する。

いわゆる理系科目で行われている授業では、対面とオンラインの両方の対応が必要になる授業がたくさんあると思うのですが、そうした授業の参考になればと思って、本日はお話しします。

今日は二つの授業を紹介します。一つは、昨年度後期に行われた「電磁気学Ⅱ」という授業です。板書をメインとした、いわゆる対面とオンラインの両対応の授業です。もう一つは、今年度前期の「物理学概説Ⅰ」で、こちらも緊急事態宣言が発令されてから両対応で行っており、スライドを用いています。

1-1. 電磁気学Ⅱについて

まず、「電磁気学Ⅱ」は物理学科の学生が履修する必修授業です。物理学科の学生なので、高校時代から電磁気学についてはある程度学んできており、概念的なところはある程度理解できていることを前提としています。その上で、この授業が目指すところは、頭の中でイメージしている概念を数式として、数学という言葉を使って表現できるところにあるので、学生が実際に手を動かして理解していく授業になります。

1-1. 電磁気学Ⅱ 授業の方法

そのため、この授業では教員が板書をしています。もちろんスライドでも授業はできるのですが、スライドで説明していると学生はなかなかノートを取りません。しかし、板書をする学生はそれにつられてノートを取るのです。この授業では板書をします。学生が手を動かすことで知識が定着したり、実践的に数式を使う力が身に付いたりするのではないかと考え、そうしたところを重視しています。

では、実際にどうやって板書を用いた講義をしてい

るかということ、昨年度の電磁気学Ⅱの授業では9割方の学生がオンラインで受け、次の時間に実験がある一部の学生のみが対面で受講していたので、基本的には板書をオンラインで配信する授業になりました。使用していたカメラは、我々の研究でも使っているようなUSBのカメラでした。それから、我々の研究は海外の研究者ともよくテレビ会議などをするのですが、そこでよく使うスピーカーフォンを使っていました。配信はポケット Wi-Fi で行っていました。

自分の授業がどのような形で学生に見えているのが教員側に表示されるような形で授業を行い、学生からチャットで質問があったときには、画面に出てくるチャットを見て答える形にしています。時々、学生から「板書が見えません」といった発言や質問があるのですが、それもこのスピーカーフォンを使うとうまくいっていて、教室側の教員の声を Zoom 参加者に届けたり、教室の学生のを Zoom 参加者に届けたりすることも可能ですし、Zoom 参加者から教員に音声を届けたり、Zoom 参加者から教室の学生に声を届けたりすることも、比較的小さな教室であれば可能だと思います。マイクの收音能力が結構大きいので、離れた所から話しても普通に收音できると思います。

授業では、質問の際にマイクをオンにして話していただいても対応できます。直接質問しづらいときには、対面の学生はリアクションペーパーを使って、リモートの学生は Zoom のチャット機能を使って質問する形を取っています。

1-3. 電磁気学Ⅱ 授業の流れ

特に電磁気学Ⅱについては演習の授業が別途あるため、基本的には90分間ひたすら板書をし、学生はノー

トを取って、手を動かして理解することを期待しています。ひたすら板書するのを聞いているのはつらいかもしれないのですが、手を動かしていれば単に聞いているだけよりも90分間はそれなりにつらくないと思っています。

授業の内容は二つのパートに分かれています。一つは、リアクションペーパーもしくはZoomのチャット機能で質問があった場合に、次回の授業でそれについて深く解説をしています。もう一つは、シラバスで書かれた内容の講義です。例えば、電磁気学Ⅱの第7回の講義では、前半が「ベクトルポテンシャルは単なる数学的モデルか」という質問に対する解説を行い（長くて30～40分程度）、その後でシラバスに書かれた内容の講義をしています。ですので、後半の講義がどんどん詰まっていってしまうことがこの授業での悩みだったりします。

質問への回答に長く時間を取るのは、やはり電磁気学だけを学んでいると何をしているのかよく分からなかったり、モチベーションが上がらなくなったりするので、学んでいることが周辺の物理学とどのようにつながっているのかを学生がイメージできるようになると、今学んでいることがどういう意味があるのかというのが何となくイメージできて、やる気にもつながると思うからです。授業で本来教える内容からは外れるかもしれないのですが、そういうところも学生にイメージをつけてほしいという狙いから、質問への回答時間を長く取っています。

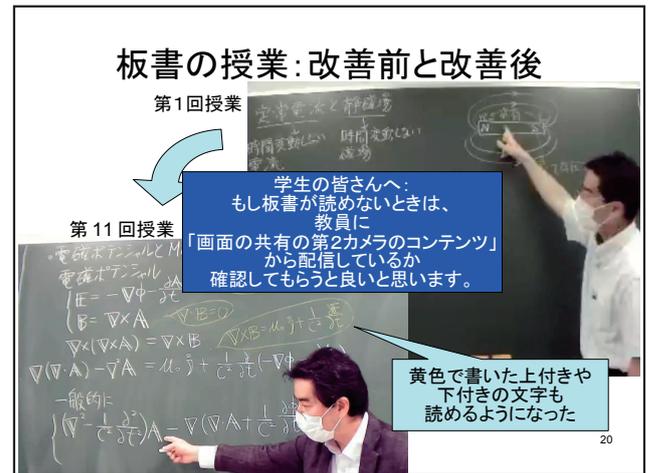
例えば、先ほどのベクトルポテンシャルに関する質問では、電磁気学Ⅱが、量子力学などの周辺の物理学とどのようなつながりを持つかを伝えることで、ベクトルポテンシャルは重要なものだということを分かってもらっています。学んでいるものの重要性に学生も少しは気付いてくれるだろうと考え、長めに時間を取って解説をしています。

シラバスの内容の講義については、ひたすら板書するのですが、そのまま何も考えずに学生が書いていくと、結局何を書いているのか本人も分からなくなることがあると思うので、必要に応じてところどころで学生が考える時間を取るようにしています。例えば、「この図を数式として表現してみなさい」という問いを出して、5分くらい時間を取っておのおの計算させた後、解説をします。

1回目から6回目までは、学生から苦情が来ては改善するというのを繰り返していました。要するに、

Zoom配信で板書が読めないという苦情が多数寄せられました。

ポイントとしては、動画の配信のときに「ビデオ」ではなく、「画面の共有」にある「第2カメラのコンテンツ」から配信すればきれいに映ることが分かったので、板書が読めないということがあれば、教員に「第2カメラのコンテンツ」から配信しているか確認してもらおうと思います。



2-1. 物理学概説Ⅰ 授業の方法

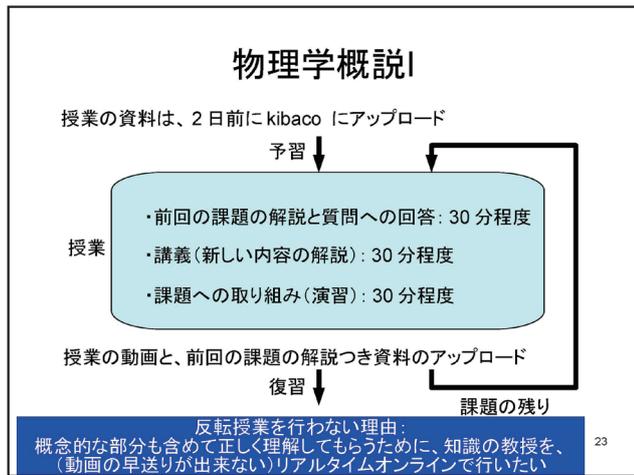
二つ目の授業「物理学概説Ⅰ」は、現在スライドを使って行っているハイブリッド授業です。対象者は先ほどと異なり他学科の学生で、半分くらいは高校で物理を学んでいない学生です。特にこれまで物理を学んでいない学生は、数式よりも先に概念的に理解することが必要なので、スライドを用いてイメージ的なものを身に付けてもらいます。この授業では、物理学をきちんと使えるようになる必要があるので、課題も出しています。

セットアップとしては先ほどと同様、スピーカーフォンを使っています。

2-2. 物理学概説Ⅰ 授業の流れ

進め方としては、授業の資料を事前に kibaco にアップロードして、予習する時間を取り、授業では前回の課題の解説、講義、演習を30分ずつ行っています。もし課題に積み残しがあれば、次回の最初までに出してもらっています。これは時間をちょっとずらせば反転授業にできるのですが、そうしていない理由は、やはり概念的な部分も含めて正しく理解してほしいからです。講義の部分を完全に事前資料にしてしまうと、学生は必要な情報だけ得ようとするかもしれないので、

知識教授の部分は動画の早送りができないようにリアルタイムで全て聞いてもらうようにしています。



特に聞いてほしい内容は、ちょっと脱線したような話でしょうか。例えば、物理学の世界は3次元でできているのですが、なぜ3次元できているかといった話を聞いてもらって、物理学に興味を持ってもらい、学習意欲を高めてもらうようにしています。それから、物理学を学んでいなかった学生たちには基本的なところが難しかったりするので、現実的なところに戻って、学生が分からないところの解説に時間を取っています。つまり、前回の授業で分からなかったところのフィードバックです。

新しい授業の内容でもなるべくスライドを多用して授業を行い、イメージがしやすいように心掛けています。

授業の残り30分で課題を提示し、それに取り組んでもらう形にしています。特に物理を学んでこなかった学生については、対面であれば教室を回りながらアドバイスや質問対応を行うことで対応できるのですが、Zoomの受講者にあまりうまく対応できなかったことが課題として挙げられます。

3. その他の授業内容

ここまでお話した授業では行っていないのですが、これまで行ってきた授業で取り組んでいたものに、定期試験用のルーブリックというものがあります。定期試験の前の週に学生に以下のプリントを配り、学生がこれを読めば何に取り組まなければならないか、何が求められているのかが理解できるものになっています。学生はこれを試験時に持って行って問題を解いてもらいます。

そして、試験用紙を提出するときこの紙も一緒に提出します。そのときに、もし時間があればルーブリックを元にテストを自己評価し、該当の箇所には○をつけてもらい、それに対して教員が採点して返します。それによって、自分が丸を付けたものと教員の実際の評価の違いも認識できます。昨年度はオンライン試験だったので実施できなかったのですが、今年度は恐らく実施すると思います。

定期試験用のルーブリック
教員が学生に望む到達度と、評価を明確にする：

電磁気学2の2回目の中間試験用ルーブリック(試験は本日2限！)

- 試験の前の週に配布
→学生がルーブリックを読み試験で問われる内容を想像して勉強する。
- 学生が試験時に持参
→解答用紙とともに提出
その際ルーブリックに自分で丸をつける
自己評価することで自分の現在の理解度を客観的に捉えてみる(ただし、成績には影響しない)
- 教員が試験を採点し、その結果を元にルーブリックに赤で丸をつける
自分で思っている理解度と教員が判断した理解度の違いを学生が認識する

2019年度 物理学科内FDセミナーのスライドより

20

31

もう一つは、課題の自己添削です。これは「物理学演習I」の田中篤司先生の取り組みを真似しました。学生が提出した課題に対して教員が一度、黒板もしくはスライドを使って解説します。それを見て学生はどこが違っているのかを理解し、自分なりに正しい答えを書いたものを再度提出させることで、自分なりに間違っているところを理解する取り組みになっています。

演習問題の自己添削
学生が、自分が理解していない箇所を自ら理解する：
←「物理学演習I」(田中篤司先生)の取り組みを真似させて頂いた

- kibaco上で課題を学期末までに提出
- 自己添削して写真を撮りPDF化

なるべく毎週取り組み、積み残さないことをおすすめします

2020年度 物理学概説I 事前学修資料より

32

哲学 B における kibaco の活用



人文社会学部人文学科 准教授

木田 直人

きだ なおと

「以前は kibaco を敵視していました」と語る木田准教授。受講生が 400 名を超える大人数授業に kibaco を導入したことによって生まれた大きなメリットについて紹介する。

1. kibaco を使えるようになった

私が今日発表したい内容は、kibaco を使えるようになったということだけです。ほかの先生方が既にできていたことができるようになったという、それだけのご報告です。昨年度はオンライン授業の必要に迫られてやむなく kibaco の使用を始めたというのが実情ですが、それによって授業の質が大幅に改善されました。元々私はアナログが大好きで、kibaco を敵視さえしていましたが、今では kibaco がないと授業はもうできません。必要不可欠なツールになっています。

現状からお話すると、5月の緊急事態宣言後は完全にオンライン授業となりました。ということは、「新しい対面授業」をしていたのは4月のみになります。昨年度はずっとオンラインで授業をしていました。そのため、この4月にやっていた内容こそが「新しい対面授業」にふさわしいものではあるのですが、今日取り上げたい授業は昨年度後期の「哲学 B」という授業です。

2. 「哲学 B」の概要

なぜ、この4月の「新しい対面授業」を取り上げないのか疑問に思う方は多いと思いますので理由を説明しますと、この哲学 B という授業はとても巨大な授業で、受講者が 400 人という規模です。そして上限設定のあるほどの巨大な授業においてこそ、kibaco がその真価を発揮するためです。そのため、実際にはいまだ「新しい対面授業」で kibaco をフル活用できていないのですが、恐らく今年度後期の哲学 B で kibaco の力を存分に発揮できるのではないかと希望的観測があります。

哲学 B では、生命倫理を中心とした現代倫理・応用倫理を扱っています。具体的には出生前診断や安楽死・

尊厳死、脳死、臓器移植などの問題、あるいは iPS 細胞、ES 細胞、遺伝子組み換えといった遺伝子治療、再生医療等の問題を扱っています。

対面のときの受講者数は 6 号館 110 番教室の収容限度である上限 400 人となっていたのですが、昨年度はオンラインになったので 456 人が受講しました。理系・文系問わず、いろいろな学部の学生が参加しています。

授業の形態は、完全にプリントによる授業です。そのため、黒板はほとんど使いません。対面授業のときでも稀にしか使わないという感じでした。そのため、対面からオンラインへの切り替えは非常にスムーズにいきました。いつもどおりプリントに沿ってやれば良いという感じだったからです。PowerPoint はまったく使用しません。いや、そんなおしゃれな技は使用できません。ずっと Word です。

3. 授業で重視しているもの

この授業には特殊性があります。この授業では倫理を扱っているので、はっきりいって答えなどありませんし、私自身も答えを知りません。そのため、この授業では知識を注入することにほとんど重きを置かず、どれだけあなたは知っていますかという観点では評価しないと、学生に最初から伝えています。知識はどうでもいいということです。

この授業で身に付けて欲しいことは、視野の拡大です。どういうことかということ、価値観がいろいろある中で、自分が軽蔑していたような価値観でさえも、そこに投錨（とうびょう）する（錨 [いかり] を投げ下ろしてその立場に立ってみる）と実は正当性がある、ひょっとすると相手の立場に自分もなり得たかもしれ

ないという体験、今まで自信を持って言えていたことが急に自信がなくなるような体験をしてほしいというのがこの授業の趣旨なのです。

ですから、知識などはどうでもよくて、小さな声で言いますが、予習・復習は要らないと学生に言っています。その命令を学生は非常に忠実に守っていて、授業改善アンケートでは授業時間外学習がほぼ0時間の学生が52.5%と、誠に理想的な数値が出ています。私は全然問題ないと思っています。専門科目であれば予習・復習の時間をたっぷり取ってほしいと思いますが、全学共通の授業なら授業時間に集中して聴いてもらって、コンフィデンスが打ち砕かれる体験だけをしてもらえたら十分だと思っています。

それに対して重視していることが、コメントを必ず出すことと、出席することです。先程の「打ち砕かれる体験」は出席しないと経験することができません。ですから、コメントをどう扱うか、400人レベルの授業で出席のチェックをどうやって行うかということに、非常に悩んできました。

授業改善アンケートで、私が重視するものが学生にきちんと伝わっているかが気になって「倫理観、社会的責任の自覚」の項目を見たところ、学内平均32.3%に対してこの授業は75.1%でした。ですので、授業の趣旨はまずまず伝わっていると考えています。コメントでは「自分だけではのみ込めなかった問題を、他の人の質問やそれに対する答えがあって理解を深められた」といったものがありました。コメントペーパーにはかなり尖ったコメントも多く、自分の立場とまるっきり逆の立場からのコメントがあり、これを通じていろいろな発見があるようです。「自分の考え方の癖のようなものを見つけられたと思う」というコメントもありました。

4. 変化したもの

次に、授業においてkibacoの使用がどのような変化をもたらしたかという点です。一つ目として対面するとき（コロナ前）とオンラインを開始して以降（コロナ中）の違いは、コメントペーパーを読むことに長い時間を取られるようになったことです。

◆変化したもの①(授業時間外)

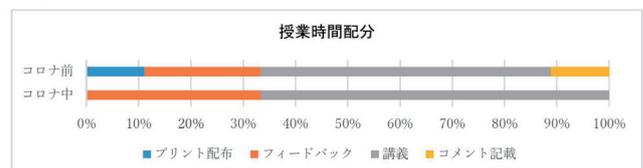
	コロナ前	コロナ後
コメントペーパー(※資料1・2)を読む	1.5時間	2.0時間
プリント印刷	1.0時間	0時間
フィードバックペーパー(※資料3・4)作成	1.0時間	0時間
計	3.5時間	2.0時間

その理由は、みんなが気合を入れて書いているからで

す。それから、コロナ前はプリント印刷にも時間を取られていたのですが、kibacoであれば前日に配ってしまうので0時間です。フィードバック・ペーパーの作成も、コロナ前は1時間ほどかかっていましたが、コロナ中は0時間です。コメントペーパーを読みながら、必要な部分をコピーしてフィードバック・ペーパーを作成するので、その作業はコメントペーパーを読む時間の中に収まってしまいます。つまり、kibacoを導入したことで1時間半くらいの手間が省けたのです。

もう一つ大きな変化として、コロナ前は授業の冒頭にプリント配布時間を10分ほど、最後にコメントを記載する時間を10分間とっていたのですが、kibacoのおかげでこの計20分が要らなくなり、最初にたっぷり30分、フィードバックの時間を取れるようになったことです。

◆変化したもの②(授業中)



授業も残りの60分全てを使えるようになりました。講義は毎回20分プラスになったということなので、20分×14回で280分(約3回分)の授業を新たにできるようになりました。

5. 対面授業から新しい対面授業へ

コロナが明けて、実際にオンライン授業から「新しい対面授業」になった場合、どのような変化があるでしょうか。

◆「対面授業」から「新しい対面授業」へ

	コロナ前 (対面)	コロナ中 (オンライン)	コロナ後 (新しい対面授業)
配布物印刷	1時間	0時間	0時間
正味授業時間(フィードバック+講義)	70分	90分	90分
授業後の質問時間	20分	0分	20分
コメントペーパーを読む時間	1.5時間	2.0時間	2.0時間
フィードバックペーパー作成時間	1.0時間	30分	30分
出席確認	1.5時間	0時間	0時間

増える 変化なし 減る

増えるのは正味の授業時間とコメントペーパーを読む時間です。これは、先ほど申し上げたように気合を入れて書いてくるからです。つまり、授業時間内の10分で書かなくていいので、膨大な量を書く学生が増えています。そのため、読む量と時間は増えてしまいましたが、それは必要なことだと考えています。

もう一つ興味深いのは、授業後の質問時間です。「新しい対面授業」における質問時間は、コロナ前と比べ

ると変わりありませんが、コロナ中と比べると増える
と見込まれます。コロナ中のオンラインの時は授業後
の質問はほとんど無いのですが、対面になると必ず増
加するでしょう。

こうして見ると、コロナ後であれば余計な手間はな
くなるし、大事な授業時間は増えるし、実際の人と人
とが触れ合う機会は増えるということで、いいとこ取
りになるだろうと考えられます。

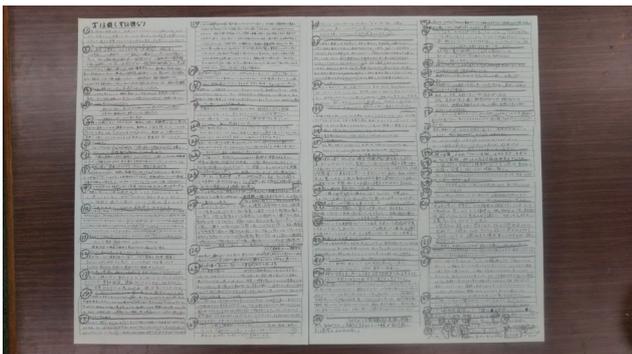
まとめると、1 点目に諸手間が著しく減少しました。
諸手間の中にはプリントを配布するだけではなく、持
ち運ぶ手間も入っています。大きな段ボールに入れて
1200 枚もまとめて運んでいましたし、配り終わった
後に教室の後ろに回って余った紙も全部持ち帰らな
ければならぬので結構な手間だったのですが、そうい
ったこともなくなります。2 点目に有意義な授業時間が確
保できます。3 点目に、授業後、学生との直接の交流
が可能になります。4 点目に、コメントに向かい合う
学生の真剣度が上がります。コメントの一例を資料に
載せていますが、こういう膨大なコメントを書いてく
る学生も少なくありません。「新しい対面授業」におい
て、この kibaco のおかげで 2 年前よりも随分といい授
業ができるようになるのではないかと考えています。

質疑応答

(小林) 大人数授業の授業を担当しているのですが、学
生の人数が多い中、効果的にフィードバックをするた
めにはどのような方法があるのでしょうかという質問を
頂いています。

(木田) 訊いて頂きたかったご質問です。資料 1 は、2
年前までやっていたフィードバック・ペーパーなの
ですが、文字通りのコピー＆ペーストでものすごい時間
がかかっていました。

資料 1



これが今では資料 2 のように改善されています。この
ようにコメントをパソコン上でコピー＆ペーストをし、
特に学生にフィードバックするものは赤字であらかじ
め示しておいて、たっぷり 30 分かけて答えています。

資料 2

第6回 感想 (第6回分)より

- Word で隠がい書と変換すると、「隠がい」の下に赤い波線がつかます。何なのでしょう、このシステムは、何なのでしょう、この世の中は、私たち人間は、自分が真逆の立場になった時やマジョリティーになった時を考えると考えられない生き物であるようです。自分の立場、相手の立場、マジョリティーの立場、マイノリティーの立場、様々な立場に立つて考えられる私ではないです。
- 「命の選別になるから、中絶はダメ」としているのは、一見、厚情に見えても残酷で薄情な考えなのではないかと思えました。
- 「隠しいのになぜ生きなければいけないのか」という問題ですが、以前朝日新聞の記事とそれについての声明を読んで考えさせられたことがあります。今年起こった、2 人の医師によって重傷の患者が本人の意思のもと安楽死させられた事件を受けて、重傷患者が自分の意思で死ぬのが認められることは同じ境遇の人たちが生きているということを否定される社会になりかねない。よって私たちが朝日新聞社は苦しみを抱えた人々の生の尊厳を保護しなければならぬと考える、ということでした。どんな障がいを持って、どんなに苦しいことがあっても、生きていること自体に価値があると、その記事を読んでからずっと私は思うようになりました。
- 「隠がい」という実体は存在せず、関係性としての概念であるという言葉が非常に考えさせられました。この考えに基づき「悪い心」をもって、いわゆる「障がい者」として扱いたいと思う一方で、自分と異なる性質をもつ人(いわゆる障がい者など)に、嫌悪感までないものの多少の違和感を感じてしまう自分がいて、そう思ってしまう自分が嫌だなと思うことが多々あります。
- 「生まれてこない方が幸せ」というのと、「死んだ方がまし(幸せ)」というのは全然違うと感じました。前者は子の親が、生まれてくる子のことをもって考えることであり、実際に生まれてきた子がどう思おうかは別です。感じ方は人によって様々で、重度の障がいを持って生まれたとしても、その子が障がいを持っていることに引け目を感じて「生まれてこない方が幸せだった」と思うかどうかはわかりません。しかし後者は、当事者本人の主観であり、事実です。そして、誰もがそのように感じる可能性があります。実際に私もそう感じたことがあります。この点で両者は全く異なると感じました。
- 「中絶は生命を尊重していない」というなら、重い障害を持ったまま生まれて苦しんでいる人の生命こそもっと尊重されるべきだと思います。ニュースやネット記事などでは、障害を乗り越えたり家族の支えを受けながら人生を送っている障害者の話ばかりですが、そういう人たちは一部だということを知りたいと思います。
- あるトークテーマについて「すぐに意見を主張することが重要」です。授業で先生が説明されたことも氷山の一角のように感じてしまい、まだまだ抱いていない立場の考えがある気がして、気安く意見を言うってはいけないのではないかと感じてしまいます。もっと目に見えていない事実を知れば、自分の意見なんてすぐに変わると思います。
- こういった問題や課題にはこれと云った答えはないように思います。それでも答えを探し続けることと意味があるのでは、私が「わからないで済ませてしまおう。先生はどのようなお考えで、答えのない問題を考え続けておられるのが少し気になりました。
- コンドームをつけない男は挨拶できない男と一緒だと思おう。
- ダウン症の程度によって、生まれたほうがよかったか、生まれないほうがよかったのか他者が議論することは基本的に間違っているのではないかと個人的には感じました。身体的に苦痛があっても生きていることに喜びを見つ出し、幸せに生きている人もいいる一方、また健康に生まれなくても、生きていくのが辛く、自殺をしようという人もいます。それなのに、生まれて来る前からダウン症だから生まれなければ良かったら決めてあげようという、自衛的な問題があるように感じました。
- デンマークやイギリス、アメリカ等、外国における出生前診断や人工妊娠中絶の議論や動向を知って、少子化対策を進めているにもかかわらず、日本では議論されていないことこそ問題であり、異常なように感じました。見ないようにしているとは思えない。
- ドラマで中絶もできずに未受診で自分で産んでしまったり、産んだ後育児放棄をしてしまう母親を見ると、中絶は子供も親も守れる方法の一つだと思います。
- ルーレットでハズレの目がない方がいいのではないだろうか。現在、ハズレを引いてしまった人は最大限にフォローすべきだとは思いますが、回避する方法が見つかった今、わざわざハズレを引く必要はないとも思う。
- 海外では母体に負担が少ない方法で中絶を行っていますが、日本ではいまだに胎児をかき出すという母体にダメージが大きい方法で行う場合が多いと聞きました。何故でしょうか？

学生と共に考える「新しい授業のかたち」

◆パネリスト

西島 壮 (大学教育センター 准教授)
 角野 秀一 (理学部物理学科 教授)
 木田 直人 (人文社会学部人文学科 准教授)
 横田 佳之 (大学教育センター長)
 松山 洋 (都市環境学部地理環境学科 教授)
 國政 浩 (教務課長)

◆進行

松田 岳士 (大学教育センター 教授)

◆参加学生

池谷 怜央 (都市環境学部 1年)
 須藤 あすか (システムデザイン学部 1年)
 古俣 結夏 (人文社会学部 2年)
 佐久間 舞 (法学部 3年)
 堀内 希沙乃 (人文社会学部 3年)
 久下 柁 (システムデザイン学部 3年)
 鈴木 飛雄馬 (健康福祉学部 3年)

(松田) ここからは、学生の意見を直接聞く機会となります。実は、学生との意見交換会は、昨年度開催したFDセミナーで初めて実施したのですが、学生の生の声を聞くことができたということで大変好評でした。今回は、授業やキャンパスライフなどについてゆっくり話を聞いていきたいと思います。

本日は7名の学生にお集まりいただきました。1人ずつ簡単に自己紹介をしていただきます。現在受けている対面とオンラインの授業の割合、都立大に入ってきたと思う点について教えてください。



自己紹介

(池谷) 私は対面授業が3割、オンライン授業が7割程度です。そのうち幾つかはハイブリッド授業で、対面とオンラインのどちらでも参加可能となっています。都立大に入ってきた点は、専門科目だけでなく教養科目や基礎ゼミナールなどでも自分の学びたいことや興味のあることに取り組める環境がある点です。

(須藤) 都内の自宅から1時間弱かけて南大沢キャンパスに通学しています。現在、理系科目の一部とアートの実技科目が対面授業で、他はハイブリッドまたは

オンラインのみとなっています。都立大に入ってきた点は、キャンパスが広く、自然も豊かで落ち着ける場所がある点と、総合大学なのであらゆる知識を持った人たちと関われる点です。

(古俣) 昨年に引き続き参加します。昨年はずっと地元の新潟でオンライン授業を受けていて、今年4月に上京しました。都立大に入ってきたことは、総合大学なのでいろいろな方と話せる点だと思います。

(佐久間) 私は埼玉県に住んでおり、昨年と今年はほぼオンラインで授業を受けました。専門科目の授業はハイブリッド型なので、大学に来て受けることもあります。都立大に入ってきたと思うことは、いろいろな学部のいろいろな考えや知識を持った方がいらっしゃるし、他学部の専門科目も気軽に受けられる点です。

(堀内) 私は現在7コマを受講しているのですが、6コマが対面で、1コマがオンラインです。都立大に入ってきたことは、先生との距離が近いので、対面とオンラインの配慮などもきめ細かくしていただける点です。

(久下) 現在は日野キャンパスで学んでいて、授業は実験のみが対面、それ以外は全てオンラインです。都立大に入ってきた点は、自分は高校のときから情報科学に興味があって都立大に進学したのですが、1～2年の基盤・教養科目で経済や宇宙など他の興味がある分野も幅広く学べたことです。

(鈴木) 対面授業とオンライン授業の割合は大体1対2です。都立大に入ってよかったことは、論文や教科書などにも載っている有名な先生が多いので、そういった方々から学べるのは良かったと思います。

キャンパスライフで困っていること

(松田) それでは、授業について聞く前に、キャンパスライフについて聞こうと思います。新年度に入って2カ月半が経過し、サークルやアルバイトなど授業以外の部分もコロナの影響を受けたと思います。またそういった中で困っていることもあると思います。皆さんの困っていることに対して大学にどのようなサポートをしてほしいですか。

(鈴木) 困っていることは、グループワークなどで自分のパソコンを持ち寄ったときにWi-Fiの環境が良くない場所があることです。

(久下) 鈴木さんと同じで、学内Wi-Fiのことです。南大沢キャンパスと日野キャンパスで学内Wi-Fiを利用しているのですが、強度が全体的に弱い印象があります。特に南大沢キャンパスでは教室によって全くといっていいほどつながらないときもあります。さらに、私は水曜4限に情報科学科の小町先生の基礎ゼミでアシスタントを務めているのですが、6号館はオンライン授業用の無線LANアクセスポイントが整備されているものの、接続人数が10人を超えるとつながりにくくなってしまいます。講義によっては、Chromeやブラウザ上でプログラムを書いて実行したり、インターネット経由で授業を受けたりすることもあるので、なるべく早く改善していただきたいと思っています。

(堀内) 私は図書館や6号館の自習スペースについてお話します。緊急事態宣言が出る前は対面授業がメインで、学生も多くキャンパスに来ていたと思います。そのとき、空きコマに自習しようと思って図書館などに行ってみたのですが、コロナの影響で座席数が制限されているため埋まってしまっていて、いろいろな所を歩き回った経験があります。今後、緊急事態宣言が明けて対面授業が増えてきたときに、座席数を増やしていただくような配慮があるといいなと思います。

(佐久間) 現在、学内には支払いが専用カードでないと使えないコピー機が幾つかあります。人社の専門図書

館の前にあるコピー機などがそうなのですが、専用カードでしか支払いできないとなると、初めて使うときに戸惑って、少し不便に感じました。そうしたコピー機の存在も周知されていないと思いますので、1年生でも分かりやすい配慮があったり、現金での支払いやその場で専用カードの購入ができるようになったりすると、もっと効率的に学びを深められると思います。

(古俣) ほとんどの2年生がそうだと思うのですが、そもそも学校に通えていること自体がすごく嬉しいです。対面授業が週1回くらいであっても、学校に行って友達と話して授業を受けられるのは、昨年1年間ずっとオンラインだった2年生にとっては本当に嬉しいことです。不安に思う点は、2年生は昨年、ガイダンスなどもほとんどなかったの、ほぼ1年生と同じような状態で2年生として学校に通わないといけない点です。学内のどこに何があるかも全然分かっていない状態なのですが、ガイダンス等の機会がないので、何とか自分たちで試行錯誤しながら生活している状況です。そこはちょっと大変だなと思っています。

(須藤) まず、図書館の開館時間が遅いことです。現在は10時開館ですが、8時50分から始まる1限に利用できれば、1限の授業がない日は1限の時間に図書館で勉強でき、規則正しい生活に貢献できると思います。また、1号館のロッカールームにある自習スペースは、大きな窓があるので解放感があり、とても居心地がいいのですが、夏になるとかなり暑くなってしまいます。対策として、カーテンなどを設けていただきたいと思っています。

(池谷) 困っていることは、緊急事態宣言の影響でクラブやサークルの活動が禁止になってしまい、入りたかったクラブにまだ入部できていないことです。5月に緊急事態宣言が延長された後、活動を再開したクラブと、まだ再開していないクラブがあるようで、それについての情報がまだ入部できていない学生には伝わっていないと感じます。それから、災害等が起きたときに大学がサポートしてくれるのかという点が気になっています。

(松田) ここまでの学生の発言を受けて先生方からお答えいただきたいと思っています。

(横田) 具体的な意見をたくさん頂戴したので、全て今後精査してきちんと対応させていただきます。特に気になったのが Wi-Fi です。久下さん、6号館の Wi-Fi が弱いというのは前期のことですか。

(久下) そうです。前期に TA をしていて、Wi-Fi がちょっと弱く感じました。

(横田) 至急調査して対処します。あとは、コピー機や自習スペースの話もありました。図書館の開館時間については学術情報基盤センター長にお話ししてみます。クラブやサークルの情報は学生課マターなので、これも学生課と相談して対処したいと思います。災害時のサポートについては、都立大学自体が東京都の緊急時の避難場所になっていて、いろいろな備蓄もあります。都民より優先して使えるかどうかははっきりとは言えませんが、安心していただきたいと思います。課長、何か補足することはありますか。

(國政) 先ほど横田センター長からもコメントがありましたけれども、まずは調査を行った上で対応できるものからしっかりやっていきたいと思います。Wi-Fi は授業環境を構成する上で非常に大事な要素ですが、昨年のオンライン授業が始まる段階ではポケット Wi-Fi で対応せざるを得ない状態でした。実際、学内で授業を配信する先生方にポケット Wi-Fi を貸し出したり、授業環境が整わない学生に対してサポートの貸し出しを行ったりしました。この3月末をもって光回線を敷設し、5月末にローカル 5G で 2000 アクセス程度が同時にできるぐらいの大容量のインフラを暫定的に確保しています。もちろん場所によって電波が入りにくかったり、何かしら不具合が発生したりしている可能性もあるので、専門的に調査をかけていきたいと思っています。教務課では、学生の皆さんの授業環境の改善、授業を実施する側の先生方の環境改善の両方を使命として考えているので、そうした要望をどしどしお聞かせください。

オンライン授業について

(松田) それでは、この意見交換の本題である授業について聞いていこうと思います。オンライン授業の感想やメリット・デメリットについて自由に発言していただきます。

(須藤) メリットは教室移動の必要がない点と、Zoom のブレイクアウトルームの機能のおかげで話したことのない学生と話す機会が増えた点です。私は 12 号館から 1 号館まで 10 分で移動しなければならない曜日があるのですが、オンライン授業のおかげで移動が楽になり、授業により集中できるようになりました。ブレイクアウトルームについては、英語の授業で学生間の話し合いをするとき、メンバーがランダムで決められるのですが、対面で近くの席の人と話し合う形式に比べ、多くの人と関わる機会ができ、楽しく受講できています。

デメリットは画質の問題で、黒板の字が一切読めないことがある点です。特に板書が重要となる理系科目では、授業動画の公開をお願いしたいです。



(池谷) メリットは、教室移動の必要がない点が一番大きいと感じます。オンラインであれば、授業が終わった後すぐに復習に取り組みたり、次の授業の予習に取り組みたりするので、とてもいいと思います。

デメリットは、対面とオンラインのどちらも行っているからこそ感じるのですが、1 日の授業で両方があると、結局大学に行ってオンライン授業を受けることになってしまって教室移動が発生し、メリットが消えてしまう点です。

(古俣) メリットは、授業によっては対面授業よりも理解度が高まる点です。受講生が 100 人、200 人という授業を対面で行うと、広い教室で黒板も先生も遠くなると思うのですが、オンラインで行えば画面に PowerPoint やレジュメが表示され、メモもしやすいし、先生の声も聞き取りやすいので、より理解が深まると思います。

困っている点としては、ブレイクアウトルームが本当に必要なかと思うときがあります。先生が取りあえず「ブレイクアウトルームで話し合ってみてください」という感じで、4～5 人のグループに分けるので

すが、学生によっては全くしゃべらなかつたり、顔すら出さない人もいます。わざとそうしているのではなく、急に「知らない人と話せ」と言われて何を話したらいいか分からなかつたり、周りがみんな先輩でどうしようということもあると思います。私も1年生のときはそうでした。ですので、本当にブレイクアウトルームで話す必要があるのかどうか、よく考えて使っしてほしいと思います。

(佐久間) メリットは、通学時間がなくなったこともありますし、イヤホンから声を聴けるので先生方の話を拾いやすい点もあります。それから都立大は、リアルタイムの授業を多くの先生方が行っていた印象があり、オンライン授業を自宅で受けていても生活のリズムを維持できたのは良かったと感じます。リアルタイムで授業を受けられるので、気になったことを授業中に気軽にチャットで質問できるのもいい点だと思います。

デメリットは、Zoomの機能についてまだ慣れていない先生方も多いようで、動画の共有一つとっても、デスクトップを共有するのか、一つの資料を共有するのか、音声も一緒に共有するのかといった方法の使い分けや、投票機能なども一定程度授業で利用する可能性もあると思うので、そういった点に関して授業を効率良くできるようにマニュアルなどがあれば、先生方も授業の進行がしやすいのではないかと思います。

(久下) 私が所属している情報科学科では、2年後期の水曜日の講義は本来全て日野キャンパスになるのですが、昨年度はオンラインだったので南大沢キャンパスからの移動が全くなく、非常に楽でした。これはオンライン授業のメリットだと感じています。しかし、Zoomの利用方法やkibacoの細かい使い方の説明があまりないままオンライン授業に移行してしまったので、あまりよく分かっていない状態で講義を受けることが多かったです。加えて、先生方もZoomやkibacoの使い方をあまり理解されていないことが結構多かったように感じました。今年度は先生方も慣れてきて、あまり問題はないように感じているのですが、都立大が挙げている「新しい対面授業」のためにも、これから入学してくる学生のためにも、操作マニュアルや使い方の説明書のようなものを配布してほしいと思います。

(堀内) メリットとしては、授業でゲストスピーカーと呼ばれる方々のお話を多く聞いたことが挙げられます。

遠くに住んでいる方や、障害を持った方であっても、オンラインであればすぐにつながられるので、お話を聞いたことはとても良かったと思います。デメリットは、マイクのミュートを解除してしまっている学生がいることです。先生が強制的にミュートにできると思うのですが、それを知らずに騒がしいまま授業が続いてしまうことがあったので、その点を改善してほしいと思います。

(鈴木) メリットは、まず通学時間がないことだと思います。私自身、荒川キャンパスまで1時間半ぐらいかかってしまうので、この分の時間を別に使えるのはいいことだと思っています。それから、チャット機能を使って質問できるのはすごくいいと思います。

デメリットとしては、集中力があまり続かず、対面より緊張感が少ないイメージがあります。それから、グループワークがしにくいことです。ブレイクアウトルームでカメラオン、ミュート解除をしても、アイコンタクトができずに衝突してしまう場面があるので、グループワークは少しやりにくいと思います。

それと、メリットかデメリットか分からないのですが、発表のときに緊張しないことが挙げられます。最近では事例検討などの発表をする機会が増え、対面よりは緊張せずに話せているのですが、やはりアイコンタクトができないので、聞いている人にどう届いているのか分かりにくいと感じています。

対面授業について

(松田) 次に、対面授業について聞いていこうと思います。緊急事態宣言が発令された後はオンライン授業の割合も増えたのですが、今年度は基本的に対面授業を行う形でスタートしています。オンライン授業と比較して、対面授業のメリット・デメリットをお聞きします。

(鈴木) 対面授業のいい点は、演習系の授業ができる点です。健康福祉学部では患者役とセラピスト役に分かれて検査や評価を練習するなど、人の体を触ってみたいと分からない部分が多いので、対面授業はこれからも欠かせません。

改善すべき点は、最近もあったのですが、1限だけオンラインで、3限から対面というのは少しだけ忙しいと思うので、そこが改善されるといいと思います。

(久下) 今年度の初めは対面授業があって、久しぶりに同級生や友人に会うことができ、非常にうれしかったのを覚えています。現在はオンライン授業やハイブリッド授業も増えましたが、1年次の対面授業と同程度のクオリティの講義を受けられていると感じています。しかし、対面授業の参加を強制する先生もいるようなので、これは早急に改善していただきたいと思っています。

(堀内) 対面授業のメリットは、クラスメイトと一緒に同じ場で授業が受けられることです。クラスメイトが頑張っているのを見てモチベーションが上がることも多いと思います。授業前後の休み時間にも友達と接することができるので、疑問を解消することもできます。

改善してほしい点は、オンラインだとランダムに割り振られるのでいつも違うメンバーと話せるのですが、対面だとどうしても同じ席に座ってしまうので、メンバーが固定化してしまう点です。

(佐久間) 私はほとんどの授業をオンラインで出ているので、「新しい対面授業」にあまり出られていないのですが、4月は専門の授業をハイブリッド型で受けました。そのとき感じたのは、家で勉強するよりも教室で講義を聴く方が集中力が非常に高まるということです。

ただ、4月はまだ緊急事態宣言が出ていないときだったので、それなりに人もいたのですが、ソーシャルディスタンスに関する配慮がなされていないように感じました。

(松田) それでは、ある意味非常に特殊な経験をされた2年生の古俣さんに聞いてみたいと思います。1年間オンラインがスタンダードのまま来てしまっていますが、対面授業に参加してどのように感じていますか。

(古俣) 2年生の中でも認識は違うとは思いますが、対面授業でキャンパスに行けるだけでテンションが上がりました。また、私は社会福祉を専攻しているのですが、ソーシャルワーカーとクライアントのロールプレイなど、人との対話を行う授業が対面でできることは非常に効果があると思います。

昨年のオンライン授業と比較して、もちろん対面の方が楽しいのですが、オンラインからどのように移行

すればいいかわからない部分もあって、例えばリアクションペーパーなどもオンラインのときは授業が終わってから空いている時間にしっかり書けたのですが、対面授業後の5分や10分で書くのは初めてだったので、この5分間で書く内容で評価されてしまうのかという戸惑いもありました。そこは説明が欲しいというか、対面授業の受け方のようなものがもう少し分かると楽になると思います。

(松田) では、1年生に聞いてみたいと思います。須藤さん、いかがでしょうか。

(須藤) 対面授業のメリットは、対面授業の方が緊張感があり、頭に入りやすい点と、近い目標を持った人が周囲にいることでモチベーションが上がりやすい点です。ハイブリッド授業をしばらくオンラインで受講したところ、中間テスト期間に他の科目の勉強に追われ、モチベーションが落ちてしまうことがありました。しかし、何となく気が向いて対面授業に参加したところ、教室で授業の話をしている学生たちを見て、自分ももっと真剣に取り組みたいと考えるようになりました。

対面授業のデメリットは、大学では授業の受け方も学生に委ねられているためか、教授の真正面に座っていても他の学生の私語で先生の言葉が聞き取れないことがある点です。注意してくださる先生もいますが、放置される先生も多い印象です。あまりにも私語が続くようであれば、どの授業でも先生からご注意いただくなどの対応をお願いしたいです。

(池谷) 対面授業のいいところは、先生方が学生の反応を直接見ることができ、わからないところがあればすぐに対応できるので、時間のロス等がオンラインより少ない点だと思います。それから、授業後に友達と授業内容や分からなかったことについてすぐに質問し合ったり、確認したり、一緒に課題に取り組んだりできるのがいいところだと感じています。

(松田) では、ここで古俣さんにもう一回振ろうと思うのですが、2年生の中には対面授業になかなか出たがらない学生が結構いると聞きます。そういった現象は見聞きしたことはありますか。2年生としてその点についてどのように感じていますか。

(古俣) 確かに対面かオンラインかを選べるならオンラ

インにしようという人は多い気がします。中にはオンラインの方が楽だという人もいると思うのですが、一番大きいのは学校生活をどのように送ったらいいかわからないことだと思います。対面授業の受け方どころか、教室がどこにあるかもよくわからないし、しかも友達もあまりいない人が2年生は結構多いです。対面授業を受けたい気持ちはありつつも、一人でよくわからない校舎に行って、一人座って対面を受ける勇気があるかという、迷う部分がかかなり大きいと思います。

(松田) それでは、ここまでの学生の発言を受けて、先生方から一言ずつコメントを頂きます。

(西島) 私が感じたのは、キャンパスに来る意味というのは、対面授業とオンラインの授業の比較だけでは話ができないのではないかとことです。というのも、私個人の大学生活を思い出すと、やはり授業に参加するのは嫌なもので、大学になぜいたかというサークルや部活の仲間がいたからです。そうしたつながりが今も一生のつながりになっているのですが、2年生の話を知ると、やはり1年生のときにサークルに入るきっかけがなかったし、2年生だと情報も入ってこないで、それでキャンパスとのつながりが持てないと、キャンパスとのつながりは授業だけではなく、何で考えるのかということも大学として考えていくべき課題だと思います。



(木田) 非常に深刻な問題があるということに改めて実感しました。西島先生がおっしゃったように、今の話は授業パートだったのですが、やはり授業外の人間関係のつながりがなくなることが根本的な問題を生じさせているような気がしました。私自身としては、授業は対面よりオンラインの方が絶対がいいと考えているのですが、授業外という観点においてはそういうことばかり言われていけないということが深刻に伝わってきました。

(松田) 考えてみればそうですね。2年生はキャンパスライフが1年間なかった中で、いきなりキャンパスに放り込まれるという1年生より厳しい状況だったわけです。

最後に、昨年最も問題になった課題やレポートについて聞いてみようと思います。授業で課される課題やレポートについて昨年、特に対面授業を知っている学生から「対面と比べて量が多い」という声がかかなり寄せられました。また先程、西島先生から、課題に対するフィードバックの重要性という話もありました。課題に対してどのようなフィードバックがいいのか、それから課題やレポートをこのように取り扱ってほしいという意見のある学生はいますか。

(須藤) 量に関しては、現在ぎりぎりついていける程度と感じており、ちょうどいいと考えています。ただ、出席確認をkibacoで行うのはできれば避けてほしいです。ある授業では、Zoom画面をどのシーンでも構わないのでスクリーンショットして、その画像をkibacoに提出するシステムになっているのですが、ある週に先生がそのシステムを授業内でリマインドするのを忘れてしまい、一部の学生が出席確認課題を提出できなくなりました。出席確認は、対面であればその場で何かを提出する形式、オンラインであれば参加者一覧をスクリーンショットする形式があると思うのですが、そういったことが難しい大人数授業の場合は、出席確認のために学生がkibacoにアクセスする時間を授業内に設けて欲しいと思います。

また、私のインダストリアルアート学科の専門科目でデザインの課題が毎週出る授業があるのですが、課題に毎回付けられている点数を知ることができず、提出された課題の中で良かったものが授業内で紹介されるだけになっています。心血を注いで作品を制作し、提出しても、紹介されなかったときはどんな点数が付いたか見当もつかないため、モチベーションを保つことが難しくなっています。点数の開示や一言でも感想やアドバイスなどのフィードバックをしていただけると改善すると思います。

(池谷) やはりレポートに対してフィードバックが欲しいと感じる場面が多いです。私は観光科学科に所属しているのですが、専門科目の授業で「実際に全員でフィールドワークを行い、それに対してレポートを書く」という課題だったものが、コロナの影響でフィー

ルドワークがなくなり、「自分でその地域について調べてレポートを出す」ことになった課題が幾つかありました。それに対して、自分が目を付けた視点や取り扱った題材が本当に正しいのかとか、こういうところに目を付けていればよかった、こういう考えができていればよかったという反応を頂けないと、自分のレポートがちゃんとできているのか不安になってしまうことがありました。やはりフィードバックを頂けると知識もつきますし、次への意欲も上がると思うので、できる限りでいいのでレポートに対してフィードバックが行われるといいと思います。

(鈴木) オンラインの授業はやはり知識系の授業が多く、ある授業は3～4限の2コマ続きなのですが、3限で授業を行い、4限は自分で教科書の内容やレジュメを見てまとめ、自分で知識の再確認をする課題があるのですが、その課題はやはり自分自身でただ聞いているだけではなくて、教科書をまた見て確認することで知識がついていると感じています。

フィードバックに関しては、一言くれる先生もいて、「よく調べている」「ここはこうの方がよかった」などと書いてもらえるとモチベーションが向上するので、一言でもいいのでフィードバックを頂けると、とてもうれしく思います。

kibaco について

(松田) kibaco に関して何か意見のある人はいますか。

(佐久間) kibaco を起点として授業が動いている中で、kibaco のマイページのところでも課題やお知らせについて確認できると思うのですが、そこにアンケートとテストの欄を作っただけだととても確認しやすいと思います。

それから、昨年は期末試験の際、対面試験とオンライン試験の切り替えの時期にメンテナンスが入り、期末の課題として課されたレポートの締め切りとかぶった学生もいたと聞きました。ですので、早め早めの連絡をしていただけるととても助かります。

(須藤) kibaco の良い点は、課題をやり遂げたらすぐに提出できる点と、未提出の課題を一覧で確認できる点です。改善してほしい点は、課題の提出期限を過ぎると提出することができなくなることです。以前、ネット環境のトラブルで課題の提出が間に合わなかったと

き、教授に直接メールで提出したところ、遅延で減点はされたものの点数を付けてくださったことがありました。そういった対応をされる先生もいらっしゃるので、遅延提出を可能にいただけるとより便利になるのではないのでしょうか。

kibaco については不満を持っている学生が多いようで、友人に改善すべき点を聞いたところ、「マイページに戻るところが分かりにくい」「提出を1回押しただけでは提出できない」「出し直しができるならドラフト進行中の画面は要らない」「全体的に見にくい」「Campus Square for WEB と統合してほしい」「とにかくインターフェースが悪い」といった意見がありました。「新しい対面授業」を目指すに当たって、もっと力を入れていただきたいと考えています。

(松田) ここまでの学生さんの発言を受けて、先生方からコメントを頂きたいと思います。

(横田) kibaco については本当におっしゃるとおりで、昨年度、学生に対するアンケートでも kibaco、Campus Square for WEB、学生ポータルをひとつにしてほしいという意見がものすごくありました。我々もそれはそうだなと思っているので、これから一生懸命努力していきますが、いろいろ大人の事情も絡んでいますので、もうしばらくお待ちください。

メンテナンス時期に関しては、kibaco をパワーアップするためにタイミングを見計らって小刻みにバージョンアップしていたのですが、たまたまそのときはその時期に設定せざるを得ない状況があり、本当に申し訳なかったと思います。学習管理システム (LMS) は Wi-Fi と同じくこれからの大学教育に欠かすことができませんので、しっかり充実させていきたいと思っています。

(角野) レポートに対してフィードバックが欲しいというご意見がありました。実は私の授業でも、毎回のレポートに関して個別に細かいコメントを書いて返しているわけではなく、全てのご意見をまとめて次の授業で解説するようにしているのですが、どういうところを評価しているのか知りたいというご意見については、レポートのどこを評価するのかをあらかじめ教員側が示すことが重要ではないかと感じました。

提出期限を延ばす点については、実はネットが落ちてしまったことを考慮して期限を延ばして受け付ける

機能が kibaco にはあります。

(松山) レポートのフィードバックは、やはりオンライン上では難しいと思います。私は授業を全て対面で行っているのですが、レポートを紙で出してもらったら赤ペンで書き込んだり、「よくできました」というはんこを押したりして、次の時間に返しています。返すことが出欠確認にもなるので、そこは対面のいい点だと思っています。

kibaco についても、教員からすれば非常に楽で、授業で使う資料をアップロードしておいてメールで通知しておけば、みんながそれを印刷してくるという感じで今は対面授業をしています。



(國政) フィードバックに関して、国の方針をお伝えしておく、文部科学省は昨年度、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン方針」を出し、その中で学修成果の可視化、学修者本位の教育への転換が大きく取り上げられています。フィードバックすることにより学生の教育に対する満足度を高め、自分たちはこういう学びをしたのだということを社会に向けて伝えられるようになることが大きな柱として示されたわけです。ですので、教務課としても、フィードバックをし易くするためにはどんなツールがあるのかといった、諸々の調査をしながら皆さんの期待に応えていきたいと思っています。

(松田) Zoom に関して「授業のスピードが合っているかどうか、講義をしていて不安になるのですが、分かりやすいスピードやブレイクの取り方、学生として感じているところがあれば教えてください」との質問が教員から来ています。

(古俣) オンライン授業の理解度に関しては、ブレイクの取り方やスピードよりも授業後のフォローの方が重要ではないかと思っています。スピードが速くてついてい

けなかったり、通信不良で授業から抜けてしまったりすることが結構あると思うので、授業の動画を公開したり、授業で話した内容をレジュメや資料にして見せたりしていただいた授業はとても分かりやすかったです。

(松田) もう一つ学生から「教員の方々が新しい対面授業を行う中で、こういった設備のサポートが欲しいというものは何かありますか」という質問が来ています。

(横田) 動画を公開するにしても kibaco は容量が限られているし、Zoom のクラウドも上限があるし、かといって教員個人のアカウントのストレージを利用するのもどうかという感じなので、大学としては公式のストレージを早く整備したいと考えています。

(松田) 本当はまだまだ議論が盛り上がると思うのですが、残念ながら時間が来ております。今回も昨年に引き続き学生に参加していただきましたが、一つひとつが具体的で、学年・学部特有の問題もあったりして、私たちが聞いていてハッとする意見がたくさんありました。こういったものを今後もぜひ続けていけたらと思います。